私の履歴書

釜本邦茂 ㉗

点取り屋の素質

参議院議員と並行し日本代表をサポートする日本サッカー協会強化推進本部長に就いた時期がある。エキセントリックなトルシエ監督に手を焼いたが、2000年に労働政務次官になり、本部長職は辞した。01年に落選して身軽になり、04年アテネ五輪や06年W杯ドイツ大会は代表チームの団長として参加した。

中田英寿ら攻撃の人材がそろったドイツ大会の惨敗は残念だった。ジーコ監督が選手任せにせず、戦術面で密に意思の疎通を図っていたら結果は違ったかもしれない。

メキシコ五輪のチームは勝つための議論が本当に活発だった。杉山隆一さんでさえ、五輪の前、新婚で体重が増えて動きが鈍ると「もうあいつは使えん」「松本（育夫）を左に回せ」とつるし上げにされた。そういう選手同士の刺激もドイツ大会のチームは足りなかったように思う。

ゴール 必要なのは意志

蹴って蹴って…自分流 磨く

05年にはそんなメキシコ組の先輩たちと第1回日本サッカー殿堂入りを果たせた。八重樫茂生さん、杉山さん、宮本征勝さん、監督とコーチだった長沼健さんと岡野俊一郎さん。もちろん恩師のクラマーさんも一緒だった。

現役の間からよくされた質問が「釜本2世」。いろんな選手がそう呼ばれたが「これは」と思ったのは日立の碓井博行だ。体も技術的にもいいものを持っていたが、性格が優しすぎたように思う。

本物のゴールハンターになるには探究心がいる。足の甲を伸ばして蹴るインステップキック一つとっても、芝の上にボールがある欧州と地面にボールがある日本の選手とでは蹴り方は違ってくる。私の場合、つま先を開き気味にボールに甲を入れていく。

プロゴルファーの杉原輝雄さんとラウンドしたときのこと。残り130ヤード。私が「8番アイアンで八分の力で打ちます」と話したら、杉原さんが「そんなん分かる？　9番アイアンのフルショットにしとき」。確かに。素人に毛が生えたヘボゴルファーに八分が表現できるわけがない。力の加減を自在に調節できるのは鍛錬を積んだ者だけだ。

シュートも同じだ。「こういう時は八分の力でカーブをかけて」と口で教えたところで、その選手と私の八分が同じとは限らない。結局は蹴って、蹴って、蹴りこんで自分で足のスイートスポットを見つけ、ボールの軌道を操る感覚を養っていくしかない。

W杯で優勝した澤選手㊧を祝福する筆者（2011年）。

私はミドルやロングのパスを得意とした。逆も真なりでパスのうまい選手はシュートも入るはずだ。問題はシュートを打つ意志の有無だ。岡崎慎司（レスター）の蹴り方を見ていると30メートルのシュートは入らない。しかし遠藤保仁（G大阪）や中村俊輔（横浜M）、中村憲剛（川崎）らパスの名手はもっと点が取れるはずだ。自分をパッサーだと定めすぎるから取れない。

05年にドイツで行われたコンフェデレーションズカップのブラジル戦で中村俊が25メートルの弾丸シュートを決めた。あの朝、宿舎で私は俊輔に「FKを直接入れる力があるのだから前が空いたらドーンと打てばいい」と話したばかりだった。やればできるのだ。

日本代表の最多得点者は75点の私ではなく、83点の澤穂希だ。PKが大嫌いという共通点はあるが、私はFW、彼女はMF。ゴールはポジションではなく意志が大切なことを澤が証明している。

（日本サッカー協会顧問）

掲載日　2016年2月28日　日本経済新聞 朝刊　36ページ
©日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。